

【報告3】 1

沖縄県公文書館の視察報告
——江戸東京博物館図書室の図書資料の保存と公開の充実に向けて——

式 淳 子*

目 次

はじめに

- 1 沖縄県公文書館の施設概要
 - 2 所蔵資料
 - (1) 琉球政府文書
 - (2) 沖縄県文書
 - (3) 米国収集資料
 - (4) 沖縄関係資料
 - 3 資料の保存
 - 4 資料の公開
 - (1) デジタルアーカイブの公開
 - (2) 展示
 - (3) 閲覧・複写
- おわりに

キーワード 沖縄県公文書館 資料保存 資料公開 デジタルアーカイブ公開
紙修復保存工房

はじめに

江戸東京博物館は開館25年がたち、開館と同時に開室された図書室も経年による新たな問題が浮き彫りになってきている。そのひとつである図書資料の保存と公開について、問題解決の手がかりを得るため、資料の保存、修復、公開に先進的な取り組みを進めてきた沖縄県公文書館を視察させていただいた。

周知の通り沖縄県は、第二次世界大戦で県民の4人に1人が犠牲となり、軍人よりも民間人の犠牲者が多かったという悲惨な過去を持つ。戦後は米国施政権下に置かれる特殊な状況にあり、1972年（昭和

*東京都江戸東京博物館司書

47) の沖縄の日本復帰後も現在に至るまで、基地問題は解決の兆しを見せていない。このような歴史を背負う県だからこそ、1995年(平成7)に開館した沖縄県公文書館は、琉球政府文書を始めとする近現代資料の保存と公開に関して、並々ならぬ使命感のもとで運営されてきた。現在は、指定管理者制度を採用し、公益財団法人沖縄県文化振興会が指定を受け、運営を行っている施設である。

次に、江戸東京博物館図書室(以下、当室という)の問題点である保存と公開について、簡単に現状を述べようと思う。書庫は、231㎡、二層に分かれており、上層部は電動式可動の集密書架、下層部は固定書架になっている。10万冊の本(図書資料)が収納できる設計だが、現在、閲覧に供している約21万冊の本が納められており、書庫の収容能力を大幅に超えてしまっている。このため、本と本の間の空間を殆ど取ることができずに配架され、本が傷みやすい状況になっている。また、建物の最上階に位置しており、外気の影響を受けやすく、特に夏場は本に適切な温湿度管理が困難である。更に、紙資料とは適正な温湿度が異なるマイクロフィルムも同じ書庫に収められてしまっている。

また、図書資料は、この図書室に隣接している書庫の他に、収蔵庫にも収められている。まとまったコレクションや、主に展示に利用するもの、明治・大正期や戦前の古い本で、慎重に扱う必要のあるもの等、約4万冊が収蔵されている。しかし、収蔵庫と図書室の位置関係や、職員数の不足、運用上の問題もあり、残念ながら収蔵庫の図書資料を閲覧に供するサービスはできていない。ただ、収蔵庫は書庫と比較すると良い環境が保たれているため、保存上の心配は少なく、特に貴重な資料や繊細な資料は収蔵庫に保管しておきたいのだが、展示される以外にあまり出番もなく、本として十分に活用できているとは言えない状況にある。

1 沖縄県公文書館の施設概要

沖縄県公文書館(以下、公文書館という)は、那覇の市街地から大体6kmくらい内陸に入った南風原^{はえぼる}町^{ちよう}という所に位置している。南風原町は沖縄県で唯一、海のない市町村で、海風などの影響を比較的受けにくいと考えられている。

地上4階地下1階の公文書館の屋根は、通気性が良く、強度が増すように高めの温度で焼いた赤瓦が使用されている。これは復元された首里城と同じ品質のものだそうである。丸瓦と平瓦を葺いて漆喰で止



【写真1】 沖縄県公文書館外観



【写真2】 閲覧展示棟

め、風雨に強いと言われているが、台風大国である沖縄では、それでも瓦が飛ぶことがあるということだ。また、雨水が溜まらないように、屋根は30度の急勾配がついている。壁面は二重になっており、外側に遮熱ルーバーを設け、直射日光を遮断し、塩害による劣化を防ぐことができる工夫がされている。

閲覧室、展示室、講堂等を有する閲覧展示棟と、公文書館業務を行っている部屋や書庫を有する管理棟に分かれている。公文書館でありながら建物の名称に「閲覧」というだけではなく、「展示」という語も並んで使われていることに、広く、わかりやすく公文書を公開したいという決意が窺われた。

2 所蔵資料

公文書館の所蔵資料は、主に次のようなものがある。

(1) 琉球政府文書

戦後、米国施政権下で琉球政府等が作成・取得した文書で、1995年（平成7）の公文書館開館時、沖縄県立図書館より受け入れた約15万4,000点の資料である。

(2) 沖縄県文書

1972年（昭和47）の日本復帰後の沖縄県の公文書で歴史的に重要なものである。

沖縄県より、永年保存と保存期間終了後の文書が、ダンボール箱にして約3,000箱運び込まれ、収集基準に基づき、評価選別会議を経て約20%を受け入れ、80%を廃棄する。尚、一旦、全ての公文書を受け入れている県は、全国で秋田県、神奈川県、沖縄県の3県だけということである。



【写真3】評価選別会議

(3) 米国収集資料

主に、アメリカ国立公文書館（NARA）から収集した沖縄戦、統治政策等の英文資料である。1997年（平成9）からは国立国会図書館との共同作業で、NARAの琉球列島米国民政府（USCAR）文書のマイクロ撮影を行い、収集した。その数は、文書約400万ページ、写真約2万6,000枚、映像約270本に上る。

(4) 沖縄関係資料

琉球王国時代の文書や沖縄の政治・経済・文化・歴史に関する資料である。ここには、中国第一歴史档案馆（中華人民共和国の公文書館）所蔵の、琉球国王から中国皇帝に宛てた文書の複製や、沖縄関連文献収集家の岸秋正コレクションが含まれている。

3 資料の保存

調査、評価・選別をして受け入れた文書類は、燻蒸された後、目録作成が行われる。目録は、資料のタイトル、作成年度、作成者、所管（発行者）、資料解説、キーワードなど、1点1点確認しながらデータペー



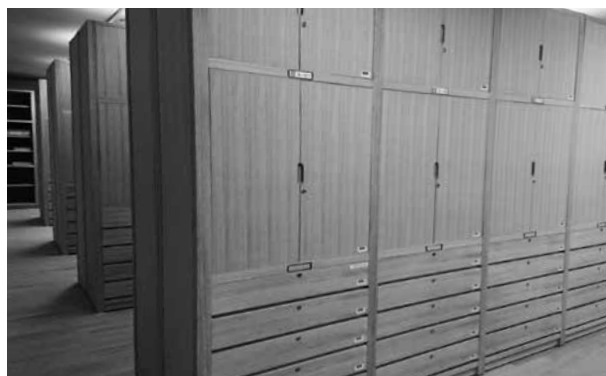
【写真4】 エンキャプシュレーション



【写真5】 大判スキャナー



【写真6】 中間書庫



【写真7】 特別保存庫

スに登録していく。その後、錆が出る可能性のあるクリップやステープラを全て除去し、糸で綴じ直し、バーコード添付による所在管理をした上で、中性紙の保存箱（中性紙のダンボール箱に弱アルカリ性ボード紙でできたフォルダーをあてはめたもの）に収めたり、ポリエステルフィルムで封入するエンキャプシュレーションと呼ばれる処置をして保存書庫に配架する。

また、館内には、裏打ち、脱酸処理、製本、保存箱の作成が行える修復室があり、紙の虫食いや、欠損部分を漉きはめして修復できる大きなリーフキャストマシンも備えられている。さらに大型地図にも対応可能なスキャナー等が設置されている。

書庫は、評価・選別が行われるまで保管する「中間書庫」や、受け入れ後、資料の分類や用途、形態等によって保管する各書庫、保存や扱いに注意を要するため、桐材の書架を備えた特別保存庫、マイクロフィルムや写真、音響・映像資料が収められたフィルム保管



【写真8】 フィルム保管庫

庫等、12室がある。その総面積は約3,235㎡、書架の総延長は34kmにも及ぶ。30年間分の文書が保存できるよう設計されており、開館23年目を迎えた現在、書庫の約6割が使用済みである。書庫が資料で満

杯になった以降のことは未定とのことであった。

また、書庫の温度は20℃、湿度は60%、フィルム保管庫は、18℃、40%に保たれている。フィルム保管庫は前室が設けられているが、保管庫に入室した際、酢酸臭を若干感じた。当室のマイクロフィルム保管棚も酢酸臭が感じられる箇所がある。いずれもTACベースのフィルムの劣化が考えられ、当室では酢酸吸収シートで凌いでいる状況である。公文書館の場合は、フィルムの酸の放散処置を施す他、デジタル化を進めているので、バックアップとしても有効だと考えられる。

4 資料の公開

(1) デジタルアーカイブの公開

公文書館のホームページで目録を公開し、検索が可能となっている数多くの所蔵資料群がある。例えば、「琉球政府文書デジタル・アーカイブズ推進事業」は2013年度（平成25）から始まり、2021年度（平成33）までに13万簿冊が検索・閲覧できるデジタルアーカイブが構築される予定である。

資料のマイクロフィルム化も含め、デジタル化を進める際、撮影、スキャンに耐えうる程度の修復が行われる。これらの作業は、公文書館の職員が行う場合と、外部の修復業者と撮影業者がチームを組んで行う場合があるようである。いずれの場合でもこうした公開に向けての一連の作業が、資料を館外に持ち出すことなく館内で行えることは、この公文書館の強みであろう。

スキャンされた後は画像をインターネット公開するためのデータ作成が行われる。個人情報保護等の理由から、利用制限が必要な箇所を特定してマスキングをしたり、キーワード、件名でも検索できるよう情報入力を充実させていく。更に、目録情報から文書画像にリンクを張る作業を行い、閲覧したい箇所が膨大な画像データのどこに該当するのか、検索が可能である。毎月、500簿冊ほどの画像を登載しているとのことである。



【写真9】修復とスキャンの様子

(2) 展示

123㎡の展示室があり、壁面に公文書館の仕事として、利用方法、資料の保存方法等を紹介した常設的なコーナーがある。同室で、戦後、米国施政権下における沖縄側の自治機構「琉球政府」における行政の長である行政主席についての企画展「沖縄県公文書館 所蔵資料展 行政主席の時代」が行われていた。企画展は年2回ほど開催され、ひとつの展覧会期は半年間ほどとなるため、保存の観点より途中で原資料から復元資料に展示替えをすることもある。その他、所蔵資料展を県内他地域で開催する移動展が定期的に開催されており、有人離島を50島近く有する沖縄県ならではのようである。

また、展示室で使用している展示台は、かつてクロス貼りのものを使用していたそうだが、紙に悪影



【写真10】 展示室



【写真11】 展示台

響を及ぼす恐れのある接着剤が使われていることがわかり、接着剤を一切使用しない展示台を職員自ら設計し、作製したということだった。

(3) 閲覧・複写

約460㎡の閲覧室には、閲覧席の他、参考資料室、特別閲覧室、ミニシアター、ビデオブース、マイクロリーダー室を有している。各部屋に分かれているので、それぞれ落ち着いて利用できる。

参考資料室には、基礎的な図書資料や新聞、地図があるが、何と云っても、琉球政府関係写真資料や、アメリカ国立公文書館（NARA）所蔵のアメリカ海兵隊写真資料など、琉球政府と米国の両方が撮影した当時の沖縄の写真アルバムが525冊ほど、自由に閲覧・複写ができるということは驚きである。

また、空中写真閲覧システムという1944～1946年（昭和19～21）にアメリカ軍が沖縄県のほぼ全域を撮影した空中写真を地域名等から検索して見るシステムがある。これは、写真用紙印刷が可能になっている。

公文書館の複写サービスは、原本資料の場合、利用者からの申請を受け、保存管理の観点から、有料で職員が複写を行う。資料の電子化やフィルムに記録された資料、A2サイズ以上の大型紙資料の複写は、公文書館が指定業者に発注し、データコピーや紙へのプリントに対応している。

利用者自身が複写できる資料もある。参考資料室の資料は有料のセルフコピー、マイクロフィルム資料やDVD・CDで提供している資料は、プリンター出力ができる。そして、特筆すべきことは、DVD・CDで提供しているものは、Web公開をしていない資料でも利用者のパソコンを持ち込んで無料でコピーが可能ということである。更に、利用者より、パソコンを持ち込むのも大変であるという声があったことから、閲覧室内に貸し出し用のパソコンを用意し、利用者が持参したUSBメモリ等に無料で自由



【写真12】 閲覧室



【写真13】 琉球政府関係写真資料及び
アメリカ国立公文書館所蔵写真資料アルバム



【写真14】 米軍撮影空中写真閲覧システム

にコピー可能ということだ。また、原資料は、利用者のカメラ等での撮影も可能となっている。もちろん、無料である。

おわりに

沖縄県公文書館の資料の保存と公開に対する積極的な取り組みは広く知られているが、特に資料公開に対する県民の要望に極力応えようとする姿勢は予想以上のものだった。資料の閲覧、複写、写真撮影、電子媒体へのコピー等の自由度の高さは目を見張るものだった。デジタル化した資料のWeb公開は、公文書館までなかなか足を運べない離島や海外移住した多くの県民、そして全国、世界中の研究者に向けて、いつでも何処からでもアクセスできる仕組みを早くから構築し、充実したサービスに繋がっている。

また、ここまで利用者サイドに立った閲覧公開をしているのは、公文書館の資料を必要としている県民が多く存在することにもよるのだろう。例えば、1946～1966年（昭和21～41）にかけて沖縄の米軍施設で働いていた人々の勤務記録カードである「軍雇用員カード」は、現在も年金受給等で必要なものであるし、1946～1951年（昭和21～26）にかけて実施された、沖縄戦によってわからなくなってしまった土地の所有権の認定調査の記録である「土地所有申請書」は、現在でも確認に使用されているそうで

ある。

当室では、資料のデジタル化やWeb公開はこれからの課題となっている。公文書と当室で扱っている図書資料では性質がかなり違い、著作権法に基づいて考えなくてはならないものも少なくないため、全ての図書資料に対応はできない。しかし、来室者にだけでなく、来室し辛い地域、例えば島嶼に住む都民や、多くの人々の共有財産として、有効利用の一助となるデジタル化に向けて具体的な事例に触れられ、大変参考になった。

また、高温多湿の亜熱帯気候に属する沖縄県は、資料の保存に適している風土とは言い難いが、そうした中で適切な保管環境を保つ設備を整え、使用方法に配慮した修復を行いながら保存する姿勢に、デジタル化と原本保存は全く別のもので、どちらも確実にやっていかなくてはならないことであると再認識した。

今回は、併せて那覇市にある紙修復保存工房の見学をした。ここは、和紙洋紙共に扱うことができ、修復不可能と思われる紙資料にも挑もうという信念で取り組んでいる修復工房である。当室の書庫の環境管理の相談をしたところ、ホームセンターで揃う材料で簡単に手作りできるカビやホコリなどを除去するためのドライクリーニングボックスの製作方法や、ロガーだけに頼らない温湿度管理の工夫について等、具体的にアドバイスをいただいた。昨今の異常気象や老朽化しつつある設備を嘆くだけでなく、書庫の状態を肌で感じることで、管理する資料と常に向き合うことの大切さを痛感した。

図書資料も歴史資料のひとつとして保存管理をしている当室にとっては、本の内容だけではなく、本そのものの形態、素材も歴史的な情報となり得、原資料の持つ風合いや質感を損なわずに保存しながら、併せて資料のデジタル化による広い公開を目指していきたいものである。

過去の資料、または過去のことが記された資料をを継承し、広く公開することで、その地域の歴史について理解し、現在や未来に活かしていくという姿勢は、公文書館も当室も共通していることである。そのために日々、地道に取り組み、成果を挙げている沖縄県公文書館には学ぶべきことがたくさんあった。

最後に、沖縄県公文書館の公文書保存普及班長の豊見山和美氏をはじめ、案内くださった職員の方々、紙修復保存工房の皆様には大変お世話になり、深く感謝申し上げます。

【参考文献・ホームページ】

* 沖縄県公文書館ホームページ

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/>

* 江戸東京博物館図書室では、『沖縄県公文書館ガイドブック2017 記録を残す・記憶をつなぐ』

『沖縄県公文書館20年の歩み』『沖縄県公文書館研究紀要』『沖縄県公文書館年報』『アーカイブズ 沖縄県公文書館だより』等が閲覧できる。